

# 大学生における家族機能の認知が 対人ストレスコーピングに与える影響について

## The Effect of Perception of Family Functioning on Interpersonal Stress-Coping in University Students

岩根 由佳  
跡見学園女子大学大学院  
人文科学研究科臨床心理学専攻  
Yuka Iwane  
Division of Clinical Psychology,  
Graduate School of Humanities, Atomi University

酒井 佳永  
跡見学園女子大学  
Yoshie Sakai  
Atomi University

### 要 約

本研究では、家族機能が対人ストレスコーピングにどのような影響を与えているのかを明らかにすることを目的として、大学生を対象に、家族機能測定尺度、短縮版対人ストレスコーピング尺度を用いた質問紙調査を行った。

家族機能の得点によりバランス群、中間群、極端群の3群に分類し、対人ストレスコーピングに対する一要因分散分析を行った結果、家族機能の極端群がポジティブ関係コーピングを取りやすいことが示された。また、凝集性と適応性がそれぞれ対人ストレスコーピングに与える影響を明らかにするため、凝集性4群と適応性4群を独立変数、対人ストレスコーピングを従属変数とする一要因分散分析を行った結果、凝集性の最も高い「膠着」と適応性の最も高い「無秩序」がそれぞれポジティブ関係コーピングを取りやすいことが示された。

このことから、凝集性と適応性が高い家族が機能的である可能性が考えられ、家族を機能的だと認知しているほど、対人関係においても積極的に働きかける可能性が推察された。また、家族がストレス場面などに面した際、家族システムを変化させて対応できると認知しているほど、人間関係でのストレスに対しても、積極的に問題に働きかけようとする傾向があると考えられた。

【Key Words】家族機能, 対人ストレスコーピング

### I 問題と目的

青年期は心理的離乳の途中であり、親中心であったそれまでの時期と異なり、親から独立し自我同一性を確立していく時期で

ある。それまでの両親や教師といった大人との関係に加え、同年代の仲間や友人との関係においてより親密な関係を構築していく段階と指摘されているが(遠矢, 1996)、青年期の友人関係は青年どうしの対等な人

間関係であり、どちらかが一方的に支えたり、配慮してくれる関係ではなく、自分の友人関係について振り返り、考えることは、青年期にはよくみられるという(落合・佐藤, 1996)。

加藤(2000)は「ストレスフルな対人関係上の出来事に対するコーピングの個人差を測定することは、個人の精神的健康を予想する上で重要である」と述べ、対人ストレスコーピング尺度を作成し、対人ストレスコーピングをポジティブ関係コーピング・ネガティブ関係コーピング・解決先送りコーピングの3つに分類している。ポジティブ関係コーピングは人間関係で生じたストレスフルなイベントに対して、積極的にその関係を改善しより良い関係を築こうと努力する方略群であり、ネガティブ関係コーピングは、そのような関係を放棄・崩壊するような行動をとる方略群、解決先送りコーピングはストレスフルなイベントにこだわらず、時間が解決するのを待つような方略群である(加藤, 2007)。

青年期を対象とした先行研究において、ポジティブ関係コーピングが友人関係満足感に正の影響を与えることや(坂田・松田, 2016)、自我同一性の確立度が高いほど友人関係の満足感が高まり、友人関係の満足感が高いほどポジティブ関係コーピングの使用頻度が高いことが分かっている(白石・津田, 2018)。また、対人ストレスコーピングがその後の精神的健康に影響することも報告されており(加藤, 2001)、対人ストレスコーピングが友人との関係や個人の精神的健康といった様々な要素に影響を及ぼすことが分かる。

親子関係に加えて、友人との関係など広

がりをもせる青年期の発達だが、家族の存在も影響している。三宅(2012)は「家族が安らぎの場、憩いの場であることは自我が健全に発達していくための一つの条件であり、その機能が不十分であるような家族、すなわち機能不全家族は、自我発達と社会適応上の問題を招くとされてきた」と述べ、大学生を対象とした調査で、家族の不適応が自信のなさや存在感の乏しさ・話せる相手の欠如を促し、種々の不適応状況を生み出していることを明らかにした。また、青年が家族機能を肯定的に認知しているほど青年の心理的自立が高いことも明らかになっており、家族システム内で生じる相互作用の働きである家族機能が青年に影響を与えることが分かっている(高坂・戸田, 2005)。

この家族機能について、家族機能を測定するためにOlsonらが開発した円環モデルは凝集性と適応性の二つの主要次元から構成されている(茂木, 1994)。凝集性(cohesion)の次元は、家族成員がお互いにもつ情緒的なつながりと定義され(草田, 1995)、凝集性の高低の度合いに応じて低い方から「遊離(disengaged)―分離(separated)―結合(connected)―膠着(enmeshed)」の4段階に分類できる。凝集性が最も高い「膠着」では過剰同一化を生み家族成員の個人化が妨げられ、凝集性の最も低い「遊離」では家族成員の自立性が強調され家族への愛情や関わりが不足する。そして中程度の凝集性である「分離」や「結合」が、自立と結合のバランスがとれ最も機能的であるとされている(茂木, 1994)。

適応性(adaptability)の次元は、状況的危機や発達の危機(ストレス)に対して、家

族システムの勢力構造や役割関係などを変化させる能力と定義され(草田, 1995), 高低によって低い方から「硬直(rigid)―構造化(structured)―柔軟(flexible)―無秩序(chaotic)」の4段階に分かれる。適応性の高い「無秩序」では変化がありすぎるが, 適応性の低い「硬直」では変化が少なすぎるなど両極に問題があり, 中程度の適応性である「構造化」や「柔軟」が最も有効であるとされている(茂木, 1994)。

円環モデルでは, 凝集性と適応性を互いに独立した次元であると考え, それぞれの4段階を組み合わせて家族を16のタイプ, 3つの群に分類している(図1)。各群のうち, バランス群には家族機能が最もよく働く健康的な家族が位置しやすく, 極端群では問題のある家族が位置しやすいといわれている(草田・岡堂, 1993)。したがって円環モデルでは, 凝集性と適応性の両次元が

高ければ高いほど, 健康的な家族であるという直線的な関係, すなわち「リニアな関係」であるとは仮定されておらず, 凝集性と適応性がいずれも中間の水準にあり, バランスがとれていることを最適とする「カーブリニアな関係」であるという仮説が想定されている(草田, 1995)。

家族機能に関してこれまでに, 子どもが家族をポジティブに評価していると抑うつ感が減じられること(西出・夏野, 1997), 家族機能測定尺度における凝集性と適応性を高く評価していると主観的幸福感を抱きやすいことなどが分かっている(岩佐, 2017)。また男子大学生における家族機能は, アイデンティティ発達を通じて, 本業である学業に対する意欲や大学に対する意欲に影響を与えていることが推察されている(白石・岡本, 2005)。

加えて, 数井ら(1996)が子どもの発達を

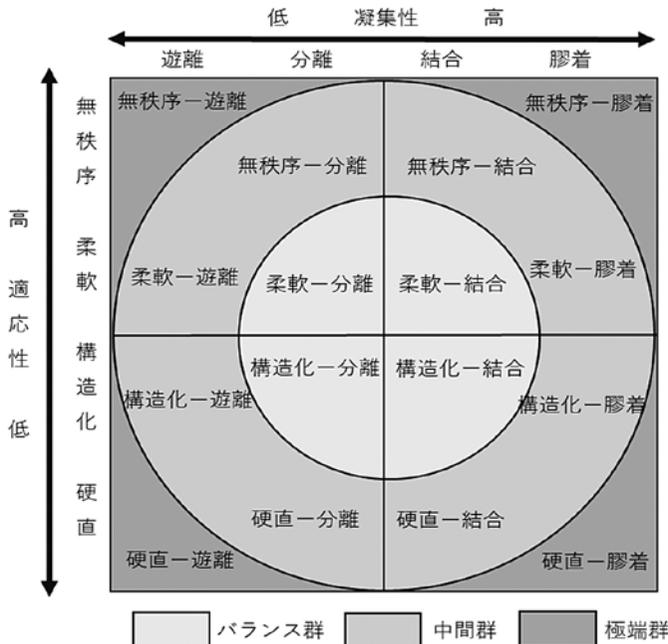


図1 Olsonらによる円環モデル(草田・岡堂, 1993, p575, 図2.1)

家族システムの的に検討した研究では、柔軟性が適度に保たれている家族は家族システムの的に良好であり、家族の凝集性と柔軟性(Olsenらのモデルでは適応性にあたる)が適度に保たれ、家族に対する評価が肯定的である状態が夫婦関係の良好さや親が体験するストレスの軽減と関連していたことが明らかになった。特に適応性は子どもの愛着の安定性と関連しており、数井らはこれを「風通しの良い家族」と特徴付け「よくまとまってはいるものの、そのまとまりは強制されたものではなく、状況に応ずる可変的な部分を内在している状態」と述べている。

このように家族機能は子どもの愛着の安定性に寄与することが報告されているが、愛着スタイルは、青年期において対人関係におけるストレスコーピングと関連することも報告されている(金政, 2005)。金政(2005)の研究では、愛着スタイル特性の安定型傾向は対人ストレスコーピングのポジティブ関係コーピングと正の相関を、ネガティブ関係コーピングとは負の相関を示していた。また、不安定型の愛着傾向は、ネガティブ関係コーピングと正の相関を、解決先送りコーピングとは負の相関を示していたという。

これらの報告を考慮すると、家族機能は青年期における対人ストレスコーピングにも影響する可能性がある。数井ら(1996)をふまえると、凝集性と適応性が適度に保たれている家族において、ポジティブ関係コーピングが高く、ネガティブ関係コーピングが低いことが予測される。また特に、適応性の高さがポジティブ関係コーピングの高さおよびネガティブ関係コーピングの

低さと関連することが予測される。

家族機能の認知は子どもの抑うつに影響を与えること(西出・夏野, 1997)、対人ストレスコーピングはその後の精神的健康や友人関係満足感に影響を与えること(加藤, 2001)を考慮すると、家族機能と対人ストレスコーピングとの関連を明らかにすることは、家族機能不全の家庭で育った子どもの支援や問題の理解に役立てることが出来ると考えられる。

そこで本研究では、大学生を対象に家族機能と対人ストレスコーピングとの関連について調査を行い、家族機能が対人ストレスコーピングにどのような影響を与えているのかを明らかにすることを目的として調査を行う。

## II 方法

### 1. 調査対象

大学生1年～4年生105名(女性95名, 男性10名: 平均年齢20.53歳  $SD=0.94$ )を対象に、Google Formのアンケート機能を用いた質問紙調査を行った。対象は、跡見学園女子大学の学生に加え、研究者の機縁法によって求めた。

### 2. 調査内容

#### 1) 基本的情報

基本的情報として、性別、年齢、家族構成(同居している家族、同居していない家族)を尋ねた。

#### 2) 家族機能測定尺度

Olsonら(1985)が開発したFACES III (Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scale III)を草田・岡堂(1993)が翻訳したもので、「凝集性」と「適応性」の各

10項目からなり、「いつもある・よくある・ときどきある・たまにある・まったくない(5点～1点)」の5件法で尋ねる。教示は草田・岡堂(1993)に倣い「あなたの家族の現在の様子についておたずねします。以下の各項目について、最もよくあてはまると思うものを選択してください」とした。

### 3) 短縮版対人ストレスコーピング尺度

対人ストレスコーピングの評価には、加藤(2000)が作成した対人ストレスコーピング尺度(Interpersonal Stress-Coping Inventory: ISI)の短縮版である短縮版対人ストレスコーピング尺度(加藤, 2002)を用いた。

「ポジティブ関係コーピング」「ネガティブ関係コーピング」「解決先送りコーピング」の3つの下位尺度からなり、各5項目の計15項目で構成される。「よくあてはまる・あてはまる・少しあてはまる・あてはまらない(3点～0点)」の4項目で尋ね、得点が高いほどコーピングの使用頻度が高いことを示す。

教示は加藤(2002)に倣い「今まで、人間関係で生じるストレスを経験したことがあります。人間関係で生じるストレスとは、例えば、『けんかをした』、『誤解された』、『何を話していいのか、わからなかった』、『自分のことを、どのように思っているのか気になった』、『自慢話や、愚痴を聞かされた』、『嫌いな人と話をした』などの経験によって、緊張したり、不快感を感じたりしたことを言います。あなたが、実際に経験した人間関係で生じたストレスに対して、普段、どのように考えたり、行動したりしましたか。以下の項目に対して、最もよくあてはまると思うものを選択

してください。」とした。

### 3. 統計解析

各尺度の記述統計量を求め、相関分析を行った。その後、先行研究に倣い凝集性と適応性の両次元について、四分範囲に基づいてそれぞれ4群に分類した。これを組み合わせ合わせた16タイプを3グループに分類し、3グループ間の比較を行った。その後の検定には Tukey を用いた。

凝集性と適応性がそれぞれ対人ストレスコーピングに与える影響を検討するため、凝集性の4群、適応性の4群をそれぞれ独立変数とした一元配置分散分析を行った。その後の検定は Tukey を用いた。

全ての統計解析は SPSS26.0 for Windows を用いた。

### 4. 倫理的配慮

アンケート調査の実施にあたり、アンケート画面の冒頭に、①アンケートの目的、②アンケートは無記名で行うこと、③調査への参加は任意であり、参加しないことによる不利益はないこと、④アンケートへの回答は調査目的のみに用いること、⑤アンケートの結果は統計的に処理をするため個人は特定されないこと、⑥アンケートへの回答を送信することをもって、調査への同意が得られたものとみなすこと、を記載した。

## Ⅲ 結果

### 1. 家族構成

基本的情報として同居している家族構成を尋ねた結果、両親と同居している人は73人(うち兄弟姉妹を含む人が51人)、片方の

親と同居している人は9人(うち兄弟姉妹を含む人が4人), 祖父母世代と同居している人は16人(うち祖父のみが5人, 祖母のみが6人), 一人暮らしは4人で, 兄弟姉妹のみと暮らしている人が2人, パートナーと同居している人が1人であった。

同居していない家族では, 祖母が最も多く71人, 祖父が62人, 兄弟姉妹が32人であった。父親は24人, 母親は23人であり, その他の項目には叔父・叔母・いとこが回答されていた(複数回答可)。

## 2. 記述統計量

各尺度の記述統計量は表1の通りであった。家族機能測定尺度の平均点は, 凝集性が29.54点( $SD=8.64$ ), 適応性が29.46点( $SD$

$=5.81$ )であった。短縮版対人ストレスコーピング尺度の平均点は, ポジティブ関係コーピングが7.28点( $SD=3.28$ ), ネガティブ関係コーピングが5.18点( $SD=3.28$ ), 解決先送りコーピングは8.50点( $SD=3.57$ )であった。

## 3. 相関分析

家族機能測定尺度における凝集性と適応性, 対人ストレスコーピング尺度におけるポジティブ関係コーピング, ネガティブ関係コーピング, 解決先送りコーピングについて, 相関分析を行った(表2)。

その結果, 凝集性と適応性で正の相関が( $r=.58, p<.01$ ), 適応性とポジティブ関係コーピングで弱い正の相関が( $r=.23, p$

表1 各尺度の記述統計量

	有効 $N$	平均値	標準偏差	最小値	最大値
凝集性	105	29.54	8.64	10.00	50.00
適応性	105	29.46	5.81	15.00	42.00
ポジティブ関係コーピング	105	7.28	3.28	0.00	15.00
ネガティブ関係コーピング	105	5.18	3.38	0.00	13.00
解決先送りコーピング	105	8.50	3.57	0.00	15.00

表2 家族機能と対人ストレスコーピングの相関分析

	凝集性	適応性	ポジティブ関係コーピング	ネガティブ関係コーピング	解決先送りコーピング
凝集性	1.000				
適応性	.575 **	1.000			
ポジティブ関係コーピング	.131	.232 *	1.000		
ネガティブ関係コーピング	-.143	-.174 +	-.264 **	1.000	
解決先送りコーピング	.099	.026	.062	.351 **	1.000

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , + $p < .10$

<.05), 適応性とネガティブ関係コーピングではごく弱い負の相関がみられた( $r=-.17, p<.10$ )。また, ポジティブ関係コーピングとネガティブ関係コーピングでは弱い負の相関が( $r=-.26, p<.01$ ), ネガティブ関係コーピングと解決先送りコーピングで弱い正の相関がみられた( $r=.35, p<.01$ )。

#### 4. 家族機能の得点による分類

家族機能における凝集性と適応性の両次元を4段階に分けるため, 先行研究に倣い四分位範囲に基づいて分類した(児玉, 2016)。凝集性尺度の得点分布(得点範囲: 10~50点)は下位25パーセントが23点, 中間が29点, 上位25パーセントが34点であった。適応性尺度の得点分布(得点範囲: 15

~42点)は, 下位25パーセントが25点, 中間が29点, 上位25パーセントが33点であった。凝集性の得点が低い方から, 遊離, 分離, 結合, 膠着, 適応性の得点が低い方から, 硬直, 構造化, 柔軟, 無秩序にそれぞれ分類した(表3)。

この4段階の分類をもとに, 家族機能の16タイプに分類し, さらに円環モデルのバランス群, 中間群, 極端群の3つのグループに分けた(表4)。16タイプの分類では, バランス群のうち「柔軟一分離」が6人, 「柔軟一結合」が4人, 「構造化一分離」が7人, 「構造化一結合」が6人であった。中間群は「無秩序一分離」5人, 「無秩序一結合」9人, 「柔軟一遊離」6人, 「柔軟一膠着」7人, 「構造化一遊離」6人, 「構造化一膠着」1人, 「硬直一分離」11人, 「硬

表3 家族機能の四分位範囲による分類

	凝集性			適応性	
	N	%		N	%
遊離	25	23.81	硬直	28	26.67
分離	29	27.62	構造化	20	19.05
結合	25	23.81	柔軟	23	21.90
膠着	26	24.76	無秩序	34	32.38

表4 家族機能の得点による群・タイプの分類

		N(%)			N(%)
バランス群 (N=23, 21.9%)	柔軟一分離	6(5.71)	中間群 (N=51, 29.52%)	無秩序一分離	5(4.76)
	柔軟一結合	4(3.81)		無秩序一結合	9(8.57)
	構造化一分離	7(6.67)		柔軟一遊離	6(5.71)
	構造化一結合	6(5.71)		柔軟一膠着	7(6.67)
極端群 (N=31, 48.57%)	無秩序一遊離	2(1.90)	構造化一遊離	6(5.71)	
	無秩序一膠着	18(17.14)	構造化一膠着	1(0.95)	
	硬直一遊離	11(10.48)	硬直一分離	11(10.48)	
	硬直一膠着	0(0.00)	硬直一結合	6(5.71)	

直一結合」6人であった。極端群は、「無秩序-遊離」2人、「無秩序-膠着」が18人、「硬直-遊離」11人、「硬直-膠着」は0人であった。3グループの人数の分布は、バランス群が23人、中間群が51人、極端群が31人であった。

### 5. 家族機能の3グループによる比較

家族機能の3グループの分類をもとに、家族機能を独立変数、対人ストレスコーピングを従属変数とした一要因分散分析を行った。

はじめに、ポジティブ関係コーピングを従属変数とした一要因分散分析を行った(図2)。その結果、家族機能の3グループの主効果が有意となった( $F(2,102) = 7.17, p = .001$ )。多重比較(Tukey法)の結果、極端群( $M = 8.81, SD = 0.56$ )がバランス群( $M = 5.61, SD = 0.65$ )よりも( $p < .01$ )、中間群( $M = 7.10, SD = 0.44$ )よりも有意に得点が高かった( $p < .05$ )。バランス群と中間群の間には有意な差はみられなかった。

ネガティブ関係コーピングと解決先送りコーピングを従属変数とした一要因分散分析では、ネガティブ関係コーピングと( $F$

(2,102) = 0.13, *n.s.*)、解決先送りコーピングのいずれも家族機能の3グループの主効果がみられなかった( $F(2,102) = 0.64, n.s.$ )。

### 6. 凝集性、適応性のそれぞれ4群と対人ストレスコーピングとの関連

3グループによる比較から極端群のポジティブ関係コーピングが高いことが分かったが、凝集性と適応性がそれぞれ対人ストレスコーピングに及ぼす影響は不明であった。そこで凝集性および適応性が、それぞれ対人ストレスコーピングとどのように関連しているかを明らかにするために、凝集性の得点の高さに基づいた4群(遊離, 分離, 結合, 膠着)を独立変数、ポジティブ関係コーピング, ネガティブ関係コーピング, 解決先送りコーピングを従属変数とする一元配置の分散分析を行った(表5)。また、適応性の高さに基づいた4群(硬直, 構造化, 柔軟, 無秩序)を独立変数、ポジティブ関係コーピング, ネガティブ関係コーピング, 解決先送りコーピングを従属変数とする一元配置分散分析を行った(表6)。

その結果、ポジティブ関係コーピングに

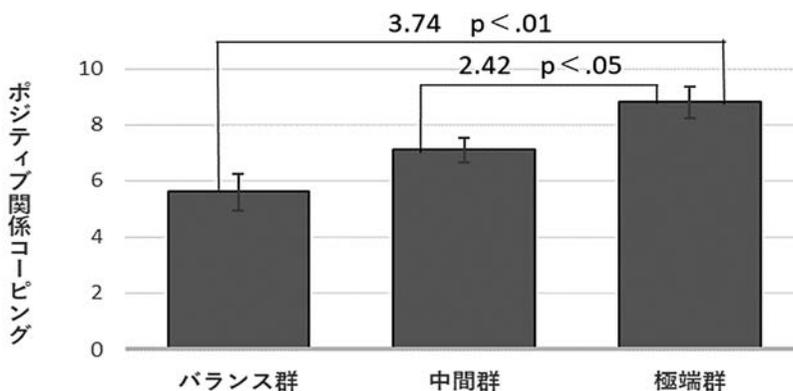


図2 ポジティブ関係コーピングに対する家族機能の一要因分散分析

表5 凝集性を独立変数，対人ストレスコーピングを従属変数とする一元配置分散分析

	遊離 (N=25)		分離 (N=29)		結合 (N=25)		膠着 (N=26)		統計値	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	F 値	p 値
ポジティブ関係 コーピング	7.7	3.3	6.6	3.8	6.2 <sup>a</sup>	2.5	8.7 <sup>b</sup>	2.8	3.42	0.02
ネガティブ関係 コーピング	5.8	3.7	5.3	3.0	5.8	3.4	3.9	3.3	1.89	0.14
解決先送り コーピング	8.6	4.3	8.6	3.4	7.9	3.4	8.9	3.4	0.31	0.82

肩文字<sup>a</sup>と<sup>b</sup>の間に有意差あり

表6 適応性を独立変数，対人ストレスコーピングを従属変数とする一元配置分散分析

	硬直 (N=28)		構造化 (N=20)		柔軟 (N=23)		無秩序 (N=34)		統計値	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	F 値	p 値
ポジティブ関係 コーピング	7.1	3.9	5.9 <sup>a</sup>	3.4	6.8	2.8	8.6 <sup>b</sup>	2.6	3.29	0.02
ネガティブ関係 コーピング	6.2	3.5	5.2	3.5	4.4	3.3	4.9	3.2	1.34	0.27
解決先送り コーピング	8.0	3.8	9.3	3.1	7.9	4.3	8.9	3.1	0.79	0.50

肩文字<sup>a</sup>と<sup>b</sup>の間に有意差あり

対する凝集性4群と( $F(3,101) = 3.42, p = .02$ )，適応性4群の主効果がそれぞれ有意となった( $F(3,101) = 3.29, p = .02$ )。多重比較(Tukey法)の結果，凝集性を独立変数としたとき，膠着( $M = 8.7, SD = 2.8$ )が結合( $M = 6.2, SD = 2.5$ )より有意に得点が高く，適応性を独立変数としたとき，無秩序( $M = 8.6, SD = 2.6$ )が構造化( $M = 5.9, SD = 3.4$ )より有意に得点が高かった( $p < .05$ )。

#### IV 考察

##### 1. 家族構成

家族構成について，同居している家族に

両親や兄弟姉妹を選択した回答が多く，対象者の多くが両親・兄弟姉妹と同居していることが分かる。また，同居していない家族では祖父母を選択した回答が多く，対象者の考える「家族」の範囲には，一親等だけでなく二親等も含まれていることが予想される。

##### 2. 家族機能と対人ストレスコーピングの関連

家族機能の凝集性と適応性の間に正の相関がみられ，草田(1995)や茂木(1994)の先行研究と同様に，本研究でも凝集性と適応性の独立性が認められなかった。

対人ストレスコーピングでは、ポジティブ関係コーピングとネガティブ関係コーピングに弱い負の相関があり、ネガティブ関係コーピングと解決先送りコーピングには弱い正の相関がみられた。このことから、ネガティブ関係コーピングを取る人は、ポジティブ関係コーピングを取りにくく、解決先送りコーピングを取りやすい傾向があると推察された。

本研究の目的である、家族機能と対人ストレスコーピングの関連では、適応性とポジティブ関係コーピングに弱い正の相関が、適応性とネガティブ関係コーピングでごく弱い負の相関がみられ、家族機能の適応性を高く認知している人ほど、ポジティブ関係コーピングを取りやすく、ネガティブ関係コーピングを取りにくい傾向があると考えられた。

そもそも適応性とは「状況的危機・発達の危機に対して、家族システムの勢力構造や役割関係などを変化させる能力」であり(草田, 1995)、適応性と弱い正の相関がみられたポジティブ関係コーピングは、「人間関係で生じたストレスフルなイベントに対して、積極的にその関係を改善し、より良い関係を築こうと努力する因子」である(加藤, 2002)。この二つは、生じたストレスに対して、変化によって状況を改善しようとする点が共通していると考えられ、家族内でリーダーシップを取ることのできる人は、対人関係においても積極的な働きかけができるのではないかと推察された。

### 3. 家族機能の3グループによる比較

凝集性と適応性の得点により、対象者を家族機能のバランス群、中間群、極端群の

3グループに分類し、対人ストレスコーピングとの一要因分散分析を行った結果、ネガティブ関係コーピングと解決先送りコーピングに対する家族機能の3グループの主効果は見られず、ポジティブ関係コーピングに対する3グループの主効果が有意となった。

多重比較では、極端群がバランス群や中間群より有意にポジティブ関係コーピングを取りやすいという結果が示されており、健康的な家族が位置しやすいとされるバランス群ではなく、問題がある家族が位置しやすいと言われている極端群の方がポジティブ関係コーピングを取りやすいことが示された。

Olson らの円環モデルでは、凝集性と適応性が中程度の段階にあることが機能的とするカーブリーニアな関係であるという仮説が想定されている。しかし、茂木(1994)や草田(1995)が家族機能測定尺度を用いて行った研究において、この仮説は支持されていない。本研究では、友人関係満足感を高め(坂田・松田, 2016; 加藤, 2001)、その後の孤独感を減少させる(加藤, 2002)ポジティブ関係コーピングを、極端群がバランス群および中間群よりも多く取る傾向が示されている。また、心理的ストレスを増加し友人関係満足感を低下させ(加藤, 2001)、その後の孤独感が増加する(加藤, 2002)ネガティブ関係コーピングについて、家族機能の3グループによる違いがみられなかった。

凝集性と適応性が中程度の段階であるバランス群ではなく、凝集性と適応性の最も高い段階と最も低い段階を含む極端群でポジティブ関係コーピングの得点が高かった

ことから、本研究において、先行研究と同様に家族機能はバランス群が最も望ましいとする仮説は支持されていないと考えられた。

茂木(1994)は、家族機能測定尺度について「円環モデルを測定する尺度として適確ではなく、凝集性と適応性を組合わせたバランス群、中間群、極端群による円環モデル上の解釈は、妥当ではないように思われる」と述べている。極端群でポジティブ関係コーピングの得点が高かった本研究の結果においても、家族機能測定尺度を用いた円環モデルの解釈が妥当ではない可能性が推察され、凝集性と適応性の中程度の段階の家族が機能的であるとした仮説と結果が異なったのはそのためではないかと考えられた。

#### 4. 凝集性と適応性のそれぞれ4群による比較

家族機能と対人ストレスコーピングとの間に、Olson らが想定した「凝集性と適応性の両次元がともに中程度の段階にあり、バランスが取れている家族が最も健康である」とするカーブリーニアな仮説があるとするれば、バランス群において最もポジティブ関係コーピングを取りやすいことが予想される。しかし、本研究では、極端群が最もポジティブ関係コーピングを取りやすいという結果になった。また極端群には凝集性と適応性が共に高い、あるいは低いもの、凝集性が高いが適応性が低いものなど、様々なパターンがあり、家族機能の凝集性と適応性それぞれが対人ストレスコーピングに及ぼす影響は不明であるため、それぞれ4群間の比較を行った。

その結果、ポジティブ関係コーピングの得点は、凝集性の4群のうち得点が最も高い「膠着」が3番目に高い「結合」より有意に高く、また適応性の4群のうち得点の最も高い「無秩序」が2番目に高い「構造化」より有意に高いという結果が示された。このように、凝集性と適応性のどちらも得点が最も高い群がポジティブ関係コーピングの得点も高かったことから、凝集性と適応性を高く認知している人ほど、対人関係においてポジティブ関係コーピングを取る傾向があると推察された。この結果は、凝集性と適応性を高く認知している大学生は主観的幸福感を抱きやすいとした岩佐(2017)の研究と一部共通しており、凝集性と適応性を高く認知していることが、個人に肯定的な影響を与えている可能性が示唆された。

草田(1995)は「日本において、健康な家族とは、凝集性が高く、柔軟で適応力の高い家族を示しているとも思われる」と述べている。本研究においても、凝集性と適応性のどちらも得点が最も高い群でポジティブ関係コーピングを取る傾向が示されたことから、家族の凝集性が高く、柔軟で適応力が高いと認知している大学生ほど、対人ストレス場面においても積極的に働きかける傾向があることが示唆されており、草田(1995)の指摘と矛盾しない結果が得られた。日本においては凝集性と適応性が高い家族が機能的であり、より健康な家族である可能性が推察される。どのような家族がもっとも機能的であるかは文化によって異なる可能性があり、今後、さらに文化による家族機能の違いについて、検討する必要があると考えられる。

## V おわりに

本研究では、家族機能が対人ストレスコーピングに与える影響を検討した。その結果、Olson らの円環モデルに基づいた家族機能の3グループのうち極端群がポジティブ関係コーピングを取りやすいこと、凝集性についても適応性についても、高く認知しているほどポジティブ関係コーピングを多く行っていることが示唆された。

この結果から、家族がストレス場面等の危機に面した際に家族システムを変化させて柔軟に対応できると認知しているほど、人間関係でストレスフルなイベントが生じた際にも、積極的に問題に働きかけ問題を解決しようとする傾向があると考えられた。

本研究においては、家族機能の3グループと対人ストレスコーピングとの関連について、極端群がポジティブ関係コーピングを取りやすいことが示されており、バランス群のポジティブ関係コーピングが高いとした仮説とは異なる結果となった。家族機能測定尺度を用いた円環モデルの解釈が妥当ではない可能性が示唆されたものの、本研究は対象が大学生のみと限定的だったことや、対象者数が比較的少なかったことから、本研究の結果を一般化することには慎重になる必要がある。今後、より広範な、より多くの対象者に調査を行い、検討を行う必要があるだろう。

また、本研究で用いた家族機能測定尺度について、凝集性と適応性の独立性が認められず、円環モデルで仮定される、凝集性と適応性が中程度の段階にあることが機能的というカーブリニアな関係もみられなかった。この結果は、日本人を対象とした

茂木(1994)や草田(1995)の先行研究の結果と一致するものであった。今後、現在の日本に適した機能的な家族システムを測定できる尺度が必要だと考えられる。

なお、本論文に関して、開示すべき利益相反事項はない。

## 引用文献

- 岩佐康弘(2017). 大学生の主観的幸福感におけるメタ認知及び家族機能の影響. 京都教育大学教育実践研究紀要, 17, 81-92.
- 落合良行・佐藤有耕(1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化. 教育心理学研究, 44(1), 55-65.
- 数井みゆき・無藤隆・園田菜摘(1996). 子どもの発達と母子関係・夫婦関係: 幼児を持つ家族について. 発達心理学研究, 7(1), 31-40.
- 加藤厚(1983)大学生における同一性のその諸相とその構造. 教育心理学研究, 31(4), 292-302.
- 加藤司(2000). 大学生用対人ストレスコーピング尺度の作成. 教育心理学研究, 48, 225-234.
- 加藤司(2001). コーピングの柔軟性と抑うつ傾向との関係. 心理学研究, 72(1), 57-63.
- 加藤司(2002). 短縮版対人ストレスコーピング尺度の信頼性と妥当性の検証. 神戸女学院大学学生相談室, 7, 17-22.
- 加藤司(2007). 対人ストレス状況における認知的評価, コーピング, 情動の関連性について. 健康心理学研究, 20(2), 18-29.
- 金政祐司(2005). 青年期の愛着スタイルと

- 感情の調節と感受性ならびに対人ストレスコーピングとの関連—幼児期と青年期の愛着スタイル間の概念的—貫性についての検討. パーソナリティ研究, 14(1), 1-16.
- 草田寿子・岡堂哲雄(1993). 家族関係査定法 岡堂哲雄(編)増補新版 心理検査学—臨床心理査定の基本— 垣内出版, 573-581.
- 草田寿子(1995). 日本語版 FACES III の信頼性と妥当性の検討. カウンセリング研究, 28(2), 24-32.
- 高坂康雅・戸田弘二(2005). 青年期における心理的自立(Ⅲ)—青年の心理的自立に及ぼす家族機能の影響—. 北海道教育大学紀要(教育科学編), 55(2), 77-85.
- 児玉夏枝(2016). 青年期における自己の葛藤と家族機能との関連についての研究—対人恐怖の傾向・自己愛的傾向に着目して—. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 62, 387-399.
- 坂田瑞樹・松田英子(2016). 大学生の主張行動および対人ストレスコーピングが友人満足感に及ぼす影響. 江戸川大学紀要, 26, 51-58.
- 白石尚大・岡本祐子(2005). 大学生の意欲低下傾向とアイデンティティ発達, 家族機能の関連性. 青年心理学研究, 17, 1-13.
- 白石萌実・津田律子(2018). 自我同一性の確立及び友人関係の満足感が対人ストレスコーピングに与える影響について. 日本心理学会大会発表論文集, 82(0), 320.
- 遠矢幸子(1996). 友人関係の特性と展開 大坊郁夫・奥田秀宇(編) 親密な対人関係の科学. 誠信書房, 86-116.
- 西出隆紀・夏野良司(1997). 家族システムの機能状態の認知は子どもの抑鬱感にどのような影響を与えるか. 教育心理学研究, 45(4), 456-463.
- 三宅義和(2012). 家族機能が青年期危機に及ぼす影響について. 神戸国際大学紀要, 83, 1-7.
- 茂木千明(1994). 家族機能査定に関する研究—家族円環モデルと日本語版 FACES III の関連性について—. 家族心理学研究, 8(2), 95-108.